

蘇芳集

子供の日

青山

丈

子の居ないところを歩く子供の日
誰に振る茅花流しの片手かな
まだ道の途中の茅花流しかな
手の平のほどの岸辺の浮葉かな
浮葉より浮葉のあひだ誰もゐない
持つて来た傘を開いて菖蒲園
花足さぬはうがよかつた水中花

水音

清水裕子

其処ここの水音高まる更衣
地震すぎのほとほと落ちて紅椿
つばき落ち尽して雨の音変はる
雪柳括られてより真つ白な
思ひ出と遊ぶ一時花なづな
春の夢思ひ起こせぬ人の顔
緋鯉跳ね眠たき昼を遠ざけり

若葉風

下平直子

早苗田にひと日やさしき山の風
若葉風竿いっばいに野良着干し
しんしんと森の暗さの新樹の香
暮鳴いて森の静寂の拡ぐれり
睡蓮や池面とろりと午後に入る
寝に立つ足裏の湿り走り梅雨
葛餅の黄粉に噎せて同い年

初ざくら

富田正吉

ころもがへ

前田陶代子

初ざくら愛を育ててゐるごとし
この道をどう歩いても桜かな
いちにちのをはりのさくらふるへをり
その辺のさくらも咲いていい時分
夜ざくらの重さに負けて歩くなり
花浴びて智慧を授かるごとくにも
野火止の落花の中を帰りけり

猛練習

野路斉子

くらげ

峰岸よし子

繭咲いて森ふところといふ辺り
繭の花だつたかと数歩立ち戻る
ポストわが盟友なりぬ椎落葉
猛練習夏うぐひすとなる為に
或る時は人とで虫知恵競べ
雷去つてこまごまと聞く森の声
紫陽花を見たし見にゆく夢の中

衣更ふ入り日のあとの水明かり
粽解く結ひたる人に会ふやうな
忘れゆくこともたづきに茄子の花
牡丹剪るあやふき重さありにけり
田水張るおほれむばかり一軒家
えごの花風に消えゆくいとまかな
大潮に乗りしくらげの月の色

遠 蛙 宮尾直美

執筆は深夜に及び遠蛙
灯台の白の眩しき五月来る
明け方の満ち来る潮や青芒
遠に啼く葭切父の忌の近し
石橋も木橋も廃れ花茨
昼顔のゆらりゆらりと葬の列
母の齡越えてしまひぬ冷しあめ

空の青 八木下末黒

来て座るなごりの藤の房ひとつ
寝転んで五月の空に蔽はるる
朔太郎忌や野茨の土手をゆく
落梅の小粒なりけり色重ね
黄菖蒲や古池跡の咲きどころ
あぢさゐの青に増えゆく空の青
明易し珈琲淹れてパン焼いて

天 鼓 吉田幸敏

ランナーとシャボンのにはひ過ぎて夏
占の木片赤き薄暑かな
どくだみを分けて径あり踏まれあり
なんぢやもんぢや遠見に海のひとかけら
昼顔ををさな子のまた振り返り
花びらを落としてよりのチューリップ
天鼓いま鳴るぞ鳴るぞと多佳子の忌

風 鈴 小川美知子

雨降れば降りやめば七変化かな
すぐ其処に夏うぐひすのあるらしく
お隣の呼び鈴が鳴る立あふひ
四十雀何処かへ行つてしまつたか
炎天や見知らぬ人に振り向かれ
午後四時か五時か風鈴ひとつ鳴る
昼顔を数へてみたりする日暮